

主 題： 聖書が描く信仰者の交わり**聖書箇所： ヨハネの手紙 第一 1章5-7節**

今朝、改めて一緒にみことばから見ていきたいのは、「信仰者同士の交わりについて」です。立ち止まって考えてみてください。皆さんは“交わり”ということばを聞いて、真っ先にどんなものを思い浮かべるでしょう。友人との楽しい時間でしょうか。食事やコーヒーをともにしたり、気の合う人と会話したりすることでしょうか。教会での礼拝や学びの後に、だれかと神様や自分の生活のことについて分かち合う時間でしょうか。また皆さんは“交わり”が自分にとって必要不可欠なものだと考えているでしょうか。それとも、あった方がよいけれども、無くても大丈夫だと考えているでしょうか。

今から遡ること80年前、1945年4月にディートリヒ・ボンヘッファーという一人の牧師がいのちを落としました。ヒトラーの暗殺計画に参与したとして逮捕された彼は、絞首刑によって処刑されてしまいます。しかしそんな大変な最期を迎えた彼には何よりも苦痛なことがありました。何だと思えますか？それは他の信仰者との交わりを失っていくことでした。処刑されるまでの約2年間にわたって、収容所から収容所へ次々と移された彼は、外の世界との接触を次第に失っていきました。自分が心から愛した人たちとの関係が徐々に断たれて、最後には完全に引き離されてしまったわけです。ボンヘッファーにとって“交わり”は、あって当たり前のもではありませんでした。そんな苦痛を味わう中であって“交わり”の重要性を覚えた彼は『共に生きる生活』という一冊の本を収容所の中で記しました。その本の中に彼はこんなことばを残していました。「他のクリスチャンの存在は、信仰者にとって他に類を見ない喜びと力の源です。…囚人、病人、寄留者であるキリスト者は、同じ兄弟との交わりの中に、三位一体である神の恵み深い臨在のしるしを見ます。孤独の中で、出会った旅人同士は互いの内に存在するキリストを認め、主にお会いするように、敬意と謙遜と喜びをもって、互いを迎え入れ合います。彼らは互いの祝福を、主イエスキリストの祝福として受け取るのです。もし兄弟と兄弟が出会うたった一度の機会にさえ、多くの祝福と喜びがあるのなら、神の御心によって、日々他のクリスチャンとの交わりに生きることを許されている者には、どれほど計り知れない富が開かれているのでしょうか。もちろん、孤独な人にとっては言葉で言い表せない素晴らしい神の贈り物であっても、それを日々受けている人には容易に軽んじられ、踏みにじられることがあるのも事実です。兄弟との信仰者の交わりは恵みの賜物であり、神の国の賜物であることを、私たちは忘れがちです。それはいつでも取り去られる可能性があり、完全な孤独から私たちを隔てている時間は、実は短いかもしれません。それゆえに、これまで他のクリスチャンと共に、信仰生活を送る特権に恵まれてきた者は、心から神の恵みを誉め称えましょう。ひざまずいて感謝し、宣言しましょう。兄弟たちと共に生きることを許されているのは、恵み、それ以外にないのです。」とあります。

果たして私たちはどうでしょう。兄弟姉妹と交わりを持つことができるということ、神様からの恵みだと考えて求めているのでしょうか。ともにいられるという喜びを、私たちに与えられた特権だと感謝しているのでしょうか。思い返してみるとかつての信仰者たちはみなそうでした。たとえば教会が誕生したペンテコステの時、最初に救われた者たちはこのようなことをしていました。使徒2:42に「そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。」とあります。教会が誕生した時、人々がしていたのは“交わり”でした。信仰者たち、たとえばヨハネもそうです。Ⅱヨハネ12には「あなたがたに書くべきことがたくさんありますが、紙と墨でたくはありません。あなたがたのところに行って、顔を合わせて語りしたいと思います。私たちの喜びが全きものとなるためにです。」と、ヨハネはだれかとともにいることを望んでいました。ヨハネだけでなくパウロも同じです。Ⅰテサロニケ2:17

「兄弟たちよ。私たちは、しばらくの間あなたがたから引き離されたので——といっても、顔を見ないだけで、心においてではありませんが、——なおさらのこと、あなたがたの顔を見たいと切に願っていました。」と記しています。また、パウロが最後にテモテに宛てて書いた手紙で、パウロの最後の願いは何だったでしょう。Ⅱテモテ1:4「私は、あなたの涙を覚えているので、あなたに会って、喜びに満たされたいと願っています。」、また4:21に「何とかして、冬になる前に来てください。」とあります。間違いなくヨハネもパウロも、信仰者とともにいるということ、交わるということのすばらしさを理解していました。だから彼らはそれを心の底から求めていました。

○聖書が描く信仰者の“交わり”：

そしてもちろん、これは今の私たちにとっても同じです。同じ信仰者たちとの交わりは、ひとりひとりにとって欠かすことのできない最高の特権でした。どうしてそのように言い切れるのか、それをきょうは、みことばから一度、見ていきましょう。特に月のみことばでも挙げられているⅠヨハネ1:5-7を中心にしながら、聖書全体を通して教えられている“交わり”の姿を学んでいきたいと思いません。自分自身の持ってきた“交わり”というものと聖書を照らし合わせながら考えてみてください。私たちの持っている信仰者との交わりがそもそも何なのか、そしてそれがどうして私たちに必要な不可欠なのかを……。全体の流れを押さえるために1-7節をお読みします。

Ⅰヨハネ1:1~7

「1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見たもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて、:2 ——このいのちが現れ、私たちはそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠のいのちを伝えます。すなわち、御父とともにあって、私たちに現れた永遠のいのちです。—— 3: 私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。4: 私たちがこれらのことを書き送るのは、私たちの喜びが全きものとなるためです。5: 神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。6: もし私たちが、神と交わりがあると言っているが、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであって、真理を行ってはいません。7: しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。」

さて、聖書の描く“交わり”についてこれから見ていきますが、三つの質問に答えながら考えていきたいと思いません。まず初めは「信仰者の交わりの基盤とは何なのか?」、二つ目は「信仰者の交わりの本質とは何なのか?」、最後三つ目は「信仰者の交わりがもたらす益とは何なのか?」です。基盤、本質、益、この三つを考えてみましょう。

1. 交わりの基盤とは? : イエス・キリスト

皆さん、どう思いますか? 私たちは“交わり”ということばをよく使います。私たちがだれかと交わりを持つ時、そもそも何が私たちを結びつけるのでしょうか? 共通の趣味や話題でしょうか? 似通った考え方、思いや感情でしょうか? 似たようなライフステージ、生活環境にいてでしょうか? 同じ出身、同じ国籍、もしくは目の前にある食事でしょうか? 確かにこの世の多くの人たちは、自分と似た環境の人たちと過ごそうとします。共通の話題や同じ考え方を持っている人となら、容易にわかり合うことができる、一緒にいて楽だと優先して時間をともにするかもしれません。逆に、違いが多ければ多いほど何を話したらいいのかわからず、関わることを避けようとするかもしれません。しかし信仰者はどうなのでしょう? そのことをみことばが明白に教えています。見てください、ヨハネはまず3節のところで、「私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。」と述べていま

す。ここでヨハネは、かつて自分自身が実体験として見聞きした永遠のいのちについて、つまりキリストを人々に伝える目的を明らかにしていました。その目的というのは、ヨハネだけが御父および御子との交わりをひとり占めにして楽しむのではなく、その同じ交わりに他の人たちをも入れられるためだったのです。人々は同じキリストを通して救われて、みな同じ三位一体の神様との交わりに入れられるのです。言い換えると、私たちの交わりの基盤、それは常にイエス・キリストにありました。

同じキリストに対する信仰が、救われた者たちを神様と結びつけるだけでなく、同時にその交わりが他の信仰者と信仰者との間をも結びつけると言うわけです。キリストによって救われた者は神様との関係を持ち、同じように他の信仰者とも関係を持つように最初からなるのです。同じ真理を別のみことばでも述べています。Iコリント6：17「しかし、主と交われば、一つ霊となるのです。」、12：13

「なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシャ人も奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つ御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つ御霊を飲む者とされたからです。」、またガラテヤ3：26-28にも「26: あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。27: バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。28: ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。」とあります。読んだ時に気づかれたと思いますが、「一つ」ということばが何度も繰り返されていました。みことばが言わんとしていることは明白です。御霊の働きによってキリストを通して救われ、主と一つとされた者はみな、同じようにして一つとされたということです。ですから主に救われた者はだれであれ、孤独な生活を歩んでいるではありません。救われている者はもうすでに同じ交わりに入れられているということです。文字どおり、いろいろな違いを持っている私たちを一つに結びつけているもの、私たちの土台、それはイエス・キリストでした。

この事実、この真理を覚える時に、すごいことだと思いませんか？考えてみてください。もし私たちが普段のように、それぞれの違いに目を留めて自分たち自身で一致できる場所を見つけ出そうとするのであれば、もしかすると同じ世代の人、話が合う人とだけ過ごそうとするかもしれません。同じ性格の人、同じ考え方の人、居心地の良い人とだけ時間を過ごそうとするかもしれません。私たちは自分たちの交わりの基盤というものを表面的な共通点に置き換えてしまうという弱さを持っていたりするわけです。しかしそうではありません。私たちが持っている交わりは、私たちは同じキリストによって救われ、同じキリストにあってもう一つの交わりに入れられているということです。私たちが何者かではなく、何かそれに値したからでもなく、恵みによってキリストを通して一つの者としてすでに召されました。罪人のために死んでくださったイエス・キリストは、私(自分)のためだけでなく、隣人(兄弟姉妹)のためにも死んでくださったのです。そして今私たちが持っている神様との交わりや兄弟姉妹との交わりは、今だけ楽しむものではなく、これから先も永遠に至るまでずっと途切れることはないということです。私たちがともに集まるその時、どんな違いがあつたにしても、いつも思い出していることが大切です。キリストにあって私たちは同じ交わりに入れられている者なのだ。同じキリストを愛している神の家族、兄弟姉妹として今を生かされているのだ。一度交わりに入れられた者は、その交わりから出ることはありません。神様と交わりを持っている者は、その交わりが途絶えることもありません。私たち信仰者の交わりの基盤は、常にイエス・キリストにあるわけです。

そしてこれが揺るがぬ土台であるからこそ、ここから少なくとも二つ、大切な事実を言うことができます。それはまず一つ目に、信仰者と未信者とでは交わりを持つことなど決してできないということです。なぜかと言うと、本当の交わりの土台がキリストに基づいているから、そのキリストをかたくなに拒んでいる者と交わりをともにすることは到底不可能な話だからです。ですから未信者と信仰者が交わりを持つことはできません。そしてもう一つ加えるとするなら、神様との交わりを持っているけれど、

他の兄弟姉妹との交わりは持っていない、持ちたくないと言うことができる者もだれひとりとしていないということです。

みことばに戻ってください。先ほど3節を見ましたが、続きを見ていくと、5-7節のところではヨハネはこのように述べていました。「5: 神は光であって、神のうちには暗いところが少しもない。これが、私たちがキリストから聞いて、あなたがたに伝える知らせです。6: もし私たちが、神と交わりがあると断言しながら、しかもやみの中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているであって、真理を行ってはいません。7: しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。」と。ここに非常に興味深い“対比”というものがなされています。ヨハネはまず6節で、光である神様と交わりがあると断言しながら、やみの中を歩んでいるような者の矛盾点を指摘しました。真に救われて、偽りや汚れのない神様と一つにされた者であるのなら、その者は汚れた罪の中をずっと歩み続けるような生き方は絶対にできないと言うわけです。信仰者は罪をいっさい犯さないという話ではありません。そうではなく、真理や聖さを愛しておられる光である神様との交わりに入れられている者、その交わりを楽しんでいる者であれば、その反対の罪や悪を愛して暗やみの中にい続けることはできないということです。それはおかしな話だということです。救われた者たちも日々罪を犯してしまいます。しかしその罪を告白して心から悔い改めて、いつもきよめられることを求めて光の中を神様とともに歩み続けていこうとするのです。信仰者は、神様が光の中におられるのと同じように光の中を歩み続けていこうとしている者です。

この流れで考えていくと、7節のところではヨハネがこのようなことを口にしていてもおかしくなかったでしょう。「神と交わりがあると断言しながら、しかもやみの中を歩んでいるなら真理を行っていません。でももし神が光の中におられるように、光の中を歩んでいるなら、私たちは神との交わりを持っています」と。普通はそう思いませんか？しかしヨハネはそうは言いませんでした。代わりに何と言いましたか？「しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、」と述べたのです。どうしてでしょう。ヨハネはどうして交わりの対象を“神様”から「互いに」へと変えていたのでしょうか？それは私たちと神様との関係は、互いの関係に現れるからです。神様との交わりは兄弟姉妹との交わりのうちに現れます。その二つを切り離して考えることはできないのだと言うわけです。もっと具体的に言うのであれば、もし私たちが本当に神様とともに歩いて、その交わりを楽しんでいるのであれば、キリストと一つにされたことを本当に喜んでいるのであれば、私たちは同じように一つとされている信仰者たちのことも愛して、その交わりを喜ぶのです。みことばはそう言うのです。

別の箇所でも同じでした。ヨハネも I ヨハネ 4 : 19 で「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」と記しています。5 : 1 にも「イエスがキリストであると信じる者は誰でも、神によって生まれたのです。生んでくださった方を愛する者はだれでも、その方によって生まれた者を愛します。」と。また、スポルジョンもかつて、このようなことばを残していました。「交わりが最も愛おしいものであるとき、あなたは他の人々とも交わりを持ちたいと最も強く願います。あなたの交わりが本当に御父と御子イエス・キリストとのものであるとき、あなたは全てのキリストにある兄弟姉妹とその祝福を分かち合うことを心から願うのです。」と。

忘れてはいけないのは、キリストの福音が私たちにもたらしてくれる救いというのは、最初から孤独に歩む信仰者を生み出すものではなかったということです。最高のキリストと一つにされて、キリストとともに歩むこと、その交わりに入れられている者は、その歩みを通して神様の愛の深さを知り、神様の喜びを味わって、神様の平安によって慰められ、神様の聖さに正しい畏れを持ち、神様の寛容さに感謝し……、そうやって歩いていきます。そのような者は、同じく一つとされた兄弟姉妹に対しても、自分が受けたものや自分が手にしたものを進んで分かち合おうとするのです。神様の愛も喜びも平安も慰

めも感謝もすべて、私たちのうちに留まるものではなく、そもそも私たちから溢れ出ていくものでした。それが聖書の描く交わりの姿だということです。同じ土台の上に立っている者たちは、勝手に分裂して別の土台に据えかえるのではありません。一つとされた者たちがともに生きていくことこそが交わりでした。神様とともに歩いていく者は自然と兄弟姉妹とも歩いていきます。どちらかが欠けているのであれば、それぞれ自分の歩みをしっかりと吟味する必要があります。私たちの交わりの基盤、それはイエス・キリストでした。

2. 交わりの本質とは？：分かち合うこと

次に、二つ目の質問を考えてみましょう。信仰者の交わりの本質とは何なのでしょう？私たちが交わりを持つ時、実際にどのようなことを私たちは行うのでしょうか。その答えを知るのに大きな助けになるのが“交わり”ということばそのものが持っている意味です。ご存じの方もいるかと思いますが、ヨハネの用いた“交わり”ということばには、もともと「同じものを共有する」とか「同じものを分かち合う」という意味が含まれていました。つまり交わりの本質というのは、簡潔に“分かち合う”ことでした。キリストにあって一つとされた信仰者は、他の信仰者とともに同じものを共有しながら、分かち合いながら生きていこうとするわけです。例えばどのようなものを私たちは共有しているのでしょうか？どのようなものを私たちは分かち合っているのでしょうか？どんなものがありますか？私たち信仰者は皆、神様の栄光を現わしていく、現わすために生きていくという同じ目標を共有しています。キリストの十字架、福音、同じ真理をも共有していますし、その福音をこの世で宣べ伝える証し人として生きていくという同じ責任を、同じ働きをも共有しています。

また霊的な生活に加えて、信仰者は実際の日々の生活さえも共有しています。一番わかりやすい具体的な例が使徒の働き2章に描かれています。ペテロのメッセージを聞いて心を打たれ、信じ受け入れた三千人の人たちがとった行動が記されています。使徒の働き2：41-42「41：そこで、彼のことがばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。42：そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。」と記されています。気づいてほしいのは、救われてしばらく経ってからではないということです。十字架に架かって死なれたキリストを受け入れたすべての者たちは、すぐに互いに交わりを持っていました。何をしていましたか？ともに同じ神様の教えを学んで、ともに聖餐にあずかって、同じキリストの犠牲というものを覚えて、そしてともに同じ神様に対して祈りをささげていたのです。それだけではありませんでした。使徒2：44-47には「44：信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいの物を共有していた。45：そして、資産や持ち物を売っては、それぞれの必要に応じて、みなに分配していた。45：そして毎日、心をつにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、47：神を賛美し、……」とあります。当時の信仰者たちはバラバラに生きていたのではありませんでした。彼らは文字どおり、ともに生きていました。群れの中には当然、富んでいる者もいれば、貧しい者たちもいたでしょう。強い者もいれば弱い者たちもいたでしょう。その中にあって、彼らは兄弟姉妹それぞれの必要を補い合いたいと願って、自分の持ち物を売ってまでも互いの必要を満たそうと愛し合っていました。間違いなく、彼らは神様から託されているものを自分のものだと堅く握りしめてはいませんでした。与えられているものは神様のものであって、むしろ同じキリストにあって与えられた交わりというものを日々楽しんで、何をすることもともに分かち合っていくことを喜びとしていたわけです。そしてすごいのはその結果どうなったか——。47節の後半にこう書かれています。「神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。」とあります。彼らが持っていた“交わり”というものが、あまりにもこの世とかけ離れた衝撃的なものだったから、その姿を見たすべての民にも喜びをもたらし、そして救われる者がさらに起こされていったのだというわけです。

私たちは“交わり”ということばをよく使います。しかし、私たちが最も模範にしたい“交わり”の姿はこれでした。これが聖書の描いている“交わり”の姿でした。さらに言うのであれば、これがクリスチャンの持っている“交わりの力”でした。霊的な生活から実際の日々の生活に至るまで、一つとされた信仰者はともに生きていこうとするのです。改めて一緒に考えてみてください。果たして私たちの“交わり”はこのような姿を反映するものとして変えられているのでしょうか。互いに分かち合うものなのでしょうか。それとも一方的に自分が受けることだけを求めているのでしょうか。それぞれの必要に自ら心を配っているのでしょうか。それとも自分の必要を訴えることに心がいつも囚われているのでしょうか。自分と息が合う人、自分が一緒にいて楽しい人、その人とだけ時間をともにしようとしているのでしょうか。それとも一つとされたすべての兄弟姉妹に対して、たとえその人が考えが違っても、たとえその人が自分を傷つけ罪を犯すような人であったとしても、変わらずにともに歩いていこうとしているのでしょうか。マタイ18章の教会戒規がここにかえてくるのです。一つとされた兄弟姉妹と良い時も悪い時も変わらずにともに歩いていくことは、ひとりひとりにとって何よりも大きな喜びになっているのでしょうか。

最初に見たボンヘッファーもこんなことばを別に残していました。「他のキリスト者との共同生活に足を踏み入れるよりずっと前、神が交わりの唯一の土台を築いてくださり、神がイエス・キリストにあって、一つのからだに結び合わせてくださったからこそ、私たちは要求する者としてではなく、感謝して受ける者として、その生活に入ります。私たちは、神が私たちのために為してくださったことに感謝するのです。神の召し、赦し、約束によって、生きる兄弟を与えてくださったことに感謝します。神が与えてくださらないものに不平を言うのではなく、日々与えてくださるものに感謝します。もう既に与えられているもので十分ではないでしょうか？神の恵みの祝福の下、罪と必要を抱える中でも共に生き続ける兄弟たち。どんな日であろうと、たとえ最も困難で苦しい日であろうとも、キリスト者の交わりという神からの贈り物に優るものなどあるのでしょうか？罪や誤解が共同生活を重く悩ませるときでさえ、罪を犯した兄弟は、それでも兄弟であり、私もまたキリストの言葉の下に立つ者ではないのでしょうか？彼の罪は、私たちが共にイエス・キリストにおける神の赦しの愛の内に生きることができ、絶えず感謝する機会となるのではないのでしょうか？結果的に、兄弟に対する幻滅の瞬間こそ、私たちにとって比べものにならない有益なものになります。それはどちらもが自分の言葉や行いによって生きることができず、私たちを真に結びつける唯一の言葉と行い、すなわちイエス・キリストにおける神の赦しによってのみ生きることができ、徹底的に教えてくれるものだからです。」と。

覚えていてください。キリストにあって一つのものとして生きている者同士を結びつけているものは、私たちの趣味でも、私たちの似通った考えでも、私たちの置かれている境遇でも、私たちの感情でもありません。私たちを常に結びつけているものはイエス・キリスト、またそのイエス・キリストにある救いの真理です。その真理において一つとされている以上、私たちが自分の思いや考え、また感情によって距離を取ったりするという事はあり得ないということです。時に、私たちが互いに罪を犯すことがあったとしても、それが交わりをしないという理由にはならないということです。私たちはもうすでに、同じ基盤に立っているからこそ、霊的な生活にしても日々の生活にしても、さまざまなことを分かち合いながら生きていこうとするのです。それが聖書の描いている信仰者の歩み、“交わり”の本質でした。

3. 交わりがもたらす益とは？： 守りと励まし

最後にもう一つ、三つ目の質問を考えてみましょう。信仰者の交わりがもたらす益とは何なのかです。考えてみてください。どうして神様は、救いを通してそれぞれに兄弟姉妹を与えてくださったのでしょうか。なぜそれぞれの信仰生活をひとり孤独に、ただ神様とすることばにのみ信頼して歩いていくとせずに、救われた最初からともに生きる神の家族というものを与えてくださったのでしょうか。どうして

神様とともに交わりを持っている者に対して、恵みの贈り物として横の交わりを与えてくださったのでしよう。もちろんいろいろなことが言えるでしょう。しかし確実に言えることがあります。それは私たちの守りと励ましのためでした。交わりがもたらしてくれる益、それはいろいろな罪や戦いを経験する日々の歩みの中で、信仰者に危険からの守りと励ましを与えることだったわけです。神様は私たちの弱さや罪深さというものを知っておられるがゆえに、そこにある危険から私たちを守るため、また励ますために、私たちに値しない交わりというものを特権として与えてくださいました。ヘブルの著者がこのような警告を口にしています。ヘブル3：12に「兄弟たち。あなたがたの中では、だれも悪い不信仰の心になって生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。」と書いています。みことばは非常に深刻に、実際に存在している罪の危険さについて、それぞれが細心の注意を払っていなさいと訴えています。ここで言われていた「不信仰の心になる」とは、ある人が自分の意志をもって神様や神のことばを拒む、そんなかたくなな状態のことを表していました。聖書が教えていることを知っていたとしても、自分の罪が心を支配し、それを愛して真理を妥協し、その教えにそのまま心から従っていくことを拒絶する姿を意味しています。また「生ける神から離れる」ともありました。それは救われている者が救いを失う可能性があるというのではなく、表面上は救われて、神に従っているように見える人が、実際には心が変わっていないから、時が経つと生ける神様に逆らって、次第に神様から離れて行く、そんな姿を表しています。

ですから罪の問題は現実のこととして存在しています。信仰者の心を、時にかたくなにさせたり、自分は救われているのだと思い込ませて、逆に神様から遠ざけようとする危険さえあったのです。私たちの日々の生活にあって、私たちは皆、いつも罪と戦って、この罪に惑わされないようにと自分自身の心を見張っている必要があります。そんな私たちに対して神様が与えてくださったもの、それが続きに書いてありました。その歩みというはひとりのものではなかったのです。ヘブル3：13「「きょう」と言われている間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。」不信仰の心になって、生ける神様から離れるような、そんな悲しいことが起こらないために、神様が備えてくださった対抗策は、私たちが「互いに励まし合う」ことでした。私たちが「互いに」を実践し合うことでした。つまり私たちの“交わり”だったということです。罪との戦いや誘惑に私たちが勝利していくのに神様が備えてくださったものは、兄弟姉妹がともに集って、互いに励まし合いながら一緒に歩んでいくことです。ここで用いられていた「励ます」ということばは、だれかのそばに寄ってその人を慰めること、力づけること、そのような意味が含まれています。私たちは皆、経験があると思います。自分ひとりだと絶え間ない罪との戦いによって心が疲れてしまったり、惑わされてしまったり、目を留めているべき真理を忘れてしまうようなことがあります。だから神様は、そのような私たちに対して必要なものとして、自分に真理を語って、励ましをしてくれる兄弟姉妹を与えてくださいました。

ある時には自分の罪深さに打ちのめされて、ひとり悲しみに暮れ、喜びや希望を見出せなくなってしまふことがあるかもしれません。しかしそんな時こそ、私たちの救い主はこんなどうしようもない罪人を愛し、自分のいのちを捨ててくださったのだと、どんな罪にもまさる神様の恵みがあるのだと、だからそこに一緒に目を留めましょうと慰め続けてくれる兄弟姉妹が欠かせないということです。ある時には信仰ゆえにさまざまな試練や迫害を経験して、あまりの苦しみに信仰を捨ててしまいたいという葛藤にかられるかもしれません。しかしそんな時こそ、義のために迫害される者は幸いなのだと、天で待っている報いは大きいのだと、だから最後まで一緒に走り続けましょうと、力づけてくれる兄弟姉妹が欠かせないということです。私たちの歩みには、どれほど主が偉大なお方なのか、どれほど救いが値しない恵みなのか、いかにキリストとの交わりがすばらしいものなのか、そういった揺るがない真理というもの、希望というものを持って励ましてくれる、そんな交わりが欠かせないというわけです。

また、これは同時に別のことも言えました。この同じ「励ます」ということばには「戒める」とか「悟す」といった意味も含まれていました。言い換えるのであれば、兄弟姉妹というのは、ただ慰め、ただ励まし合うだけではなくて、過ちや罪を見出すことがあれば、互いに戒め合うことも必要なのだというわけです。神様と光の中を歩んでいこうとしている兄弟姉妹たちにとって、外れていこうとしている人がいるのであれば「それは違いますよ」と、その光にとどまり続けるようにとってくれる兄弟姉妹が欠かせないということです。もし他の兄弟が誤った道に進んでいるのを私たちが目の当たりにするのであれば、神様を忘れて罪を愛して、かたくなに悔い改めようとしないう者がいるのであれば、その時は同じキリストにある者として、愛を持ってそれを正してあげようとするわけです。キリストにあって神様との交わりを持っているのであれば、光の中を歩んでいきたいと願っているのであれば「その道から外れていませんか？」と、「あなたに喜びや平安、感謝が与えられる道から逸れていませんか？」と、「あなたがやっていることは主の前に喜ばれることでしょうか？」、「よく考えてください、自分の罪を素直に認めて、心から悔い改めて、最高のキリストに立ち返ってください」と言って、時には戒めを与えるわけです。こうやって愛と忍耐を持って互いに戒め合うことも、それぞれの歩みにとっては欠かせないものでした。それが大切な交わりになるのです。逆もまた然りです。もしだれかが自分のところにやって来て、自分のうちにある間違いや過ちを指摘するのであれば、自分のうちに光の中を歩んでいないような生き方を周りから見て指摘されることがあるなら、その声に耳を傾けることはとても重要なことです。私たちは自分の弱さや過ちを聞きたくない、見たくないと思ってしまいます。しかしもしその人が愛を持って、私たちが光の中を歩み続けることができるようにと、自分に見えていないことを気づかせようとしてくれているのであれば、その働きを主に感謝して喜んで受け入れることです。私たちが惑わそうとする、私たちが道から逸らそうとする罪の持っている恐ろしさは、現実のものとして存在しています。その中で生きて行く私たちに、神様が恵みによって与えてくださった特権こそ、ともに集まって互いに励まし続けることでした。ともに「互いに」を実践し続けることでした。

自分だけでなく、一つとされた兄弟姉妹がだれも罪に惑わされてかたくなにならないように、私たちは互いに福音を分かち合い、同じ基盤であるキリストを覚え続けられるようにと、日々助け合っていくのです。ヘブル10：24－25に「また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。」と書いてありました。振り返って考えてみましょう。日々、兄弟姉妹と持っている私たちの“交わり”というものは、果たしてその人の歩みにとって守りや励ましになっているのでしょうか。同じキリストにあって同じ目標を分かち合い、同じ働きや責任を分かち合っている者として生かされている私たちは、その目標を目指すために互いに助け合いながら、交わりを持って歩んでいこうとしているのでしょうか。もちろん私たちは兄弟姉妹と楽しい時間を持つことはできます。集って食事やコーヒーをともにすることもできます。礼拝後に神様や自分の生活について、いろいろと分かち合う機会を持つこともできます。しかし忘れてはいけないのは、それらは交わりのゴールではありません。それは単なる一つ的手段にしか過ぎません。同じキリストにあって一つの家族としてともに生かされている者たちにとって、ますますキリストに似た者へとなり、神様の栄光を現していくという、その共通の目標を果たすための手段でしかありません。ですから私たちは、手段を目標と置き換ええないことです。信仰者にとって互いの交わりは、時々、持ちたい人とだけ持つものではありません。ただキリストにあって、神様との交わりに既に入れられているすべての者たちにとっては、それこそが自然な生き方でした。だからこそ、それぞれにとって絶対に必要不可欠なものだったのです。

私自身、このみことばを通して、自分の交わりのあり方について改めて考えさせられる機会でした。願わくは、皆さんも同じであればと思います。どんな時も神様から与えられたみことばというものを互

いに分かち合って、神様から受けた愛や赦し、喜びや慰めを互いに分かち合う者として、神様にある交わりをあかしする者として続けてともに成長していきましょう。